

人権保育専門講座8 [連続講座③] (三重県委託事業)



常磐会短期大学 教授 しめだ しんいちろう 卜田 真一郎さん

人権保育専門講座8は3回の連続講座です。家庭支援推進保育士の方を中心に、専門性を高めたい保育関係者の方々を対象に開催しています。

この連続講座は、「共有」「交流」「発信」の視点を大事に進めています。

「共有」…ゲストスピーカーの話を聞いて、似たような子どもや地域の現状や課題を共有します。

共有することで、自分がモヤモヤしていたことが何であるのかははっきりしてきます。

「交流」…交流をとおして、他の保育士から「こんなことやっているよ」という実践などを聞き自身のアイデアやイメージを豊かにしていきます。

「発信」…今後、保育士自身が現場でどのようなことに取り組んでいくのか、「自分にできる次の一歩」を考え、紙に書いて発信していきます。

連続講座の3回目となる今回は、ゲストスピーカーに常磐会短期大学の魚森茂さんをお招きし、『子どもと向き合うおとなの姿勢について考える』というテーマでお話いただきました。県内各地から35人の方の参加がありました。

## 『私の履歴書』

常磐会短期大学 准教授 うおもり しげる 魚森 茂 さん



### T先生との出会い

私は1950年に生まれました。決して裕福な家庭に生まれたわけではありません。せめて子どもだけは学校へ行かせたいと親が育ててくれて、大学に行くことができました。

私が小学校2年生のとき、母親が近所に住んでいた大学生（のちのT先生）に、私が書いた詩を見せました。「ハンバーグ、1つ食べたろうまかった。もう1つ食べたらもっとうまかった」その詩をめちゃくちゃほめてくれました。それがT先生との出会いです。私は小学校のときは児童会の役員もして、楽しく学校生活をおくりました。

中学校2年生のとき、生徒会役員に立候補し6票差で負けました。私は背が低く、劣等感を感じているうえ、選挙で負けてしまったこともあり、人前に出たくなくなり、自分を卑下しました。そんな私を見て、父が「劣等感とは人生の敗北だ」と書いた紙をくれて励ましてくれました。しかし、なかなか立ち直ることができず、高校に行っても楽しくはありませんでした。大学受験に失敗したとき、あのT先生が「不合格になったから、立ち止まって考える機会ができるんじゃないか。ある意味よかったんじゃないか」と励ましてくれました。私は教師になりたいと思っていましたが、T先生に「教育大学ではないところで学んで、教師の

世界を見た方がいいのではないか」と言われて、1年遅れで工学部に進学しました。ただ、大事な授業以外は、アルバイトに明け暮れた4年間でした。

T先生は正月に教え子を家に集めていました。大学時代、毎年私もそこに呼んでいただいていた。そこには在日の子ども部落の子どもも集まっていた。最初は雑談をして楽しく話をしていましたが、だんだん本音で語るようになっていき、最後は泣きながらそれぞれが抱えているものをさらけ出して話していました。私は黙って聞いていることしかできませんでした。自分は差別をなくすために何をしたらいいのか。何もできていない。「差別をなくすために自分に何かできないか」という思いを抱いて教師になりました。

## 教師になって



初任の学校で一番最初に私に声をかけて、いろんな話をしてくれたのがK先生です。普段、K先生は生徒に慕われて、その学校で一番人気の先生でした。ある日、K先生と2人有的时候きに、K先生が自身の生い立ちについて話ってくれたことがありました。そのとき「この先生についていこう」と決意しました。

4年経って異動した次の学校は、子どもたちが集会に集まってこないような学校でした。生徒にどうかかわったらいいかわかりませんでした。年度のはじめの家庭訪問のとき、ある保護者から「先生、よかったな。あの子が転校して」と言われました。1年生のときに1番やんちゃだった子が2年生になる前に転校しました。その子のことを言っていたのです。その子が2学期に戻ってきて、自分のクラスに入りました。「この子と勝負やな」と思ってかかわっていきました。また、そのクラスには休みの多かった子がいました。父母がおらず、虐待を受けているということで、関係機関と連携し、何とか施設に入ることができました。夏休みや冬休み、正月にはその施設の子のなかには家に帰ることができる子もいましたが、その子は虐待があるため、家に帰ることができませんでした。施設に入った最初のお正月、その子に会いに行くと「先生、来てくれてありがとう」と言われました。本音はどうだったのかなと思います。「帰りたいたい」という思いがあったと思います。しばらくすると、その子は施設を抜け出してどこに行ったのかわからなくなりました。それ以降、まったく音沙汰がありませんでした。気の毒なことをしたと思いながら月日が経ったのですが、同窓会でその子と再会しました。お互い、涙を流しながら当時のことを謝りました。その子に何もできなかった情けなさはずっと残っています。

やんちゃな子はその子なりの信念がありました。「自分は絶対に人には手を出さない」と決めている子がいました。「中学校を卒業したら理容師になる。家の仕事を継ぐんだ。手をケガしたらそれができない。それだけは守っているんだ」と言っていました。そんな子とつながりをつくった2年間でした。

次の3年間、1年生から学年をもちあがりました。生活が荒れた生徒と出会い、この生徒のお母さんとは毎日話さないといけないと思いました。3年間、毎日家庭訪問して学校でのその子の様子を話しました。他の子どもたちも「先生、今日は家に来るのかな」と気にしていたようです。その子は私が毎日家に来るのが嫌だったかもしれませんが、教師が家に行くということは大事なことだと思っています。



## 大切なことは毎日続ける

学級通信を最初に出したときは年間で1号しか出せませんでした。「これではいかん」と思い、次の年から毎日発行するようにしました。事前に書いておき、修学旅行へ持っていき子どもたちに渡しました。子どもたちの感想も学級通信に載せました。クラスのみみんなでその感想を読むことで、その子のがんばりがわかり、声をかけることができます。「大切なことは毎日やっている。食べること。寝ること。先生は学級通信を出すことが大切だと思っている。だから毎日出すんだ」と生徒たちに話しました。夏休みは製本した学級通信を持って、土日を中心に家庭訪問しました。親はびっくりします。春に行く定例の家庭訪問とは違い、普段の家庭のようすを知ることができます。冬休み、春休みも学級通信を持って家庭訪問しました。

言うだけでなく、自分が実行しないと生徒に伝わらないと思い、ずっと続けました。

## 不登校の子どもの気もち

先輩の先生から「定時制高校の数学の先生が足りないから行ってくれ」と言われ、引き受けました。定時制高校の状況は想像以上でした。カップラーメンを食べながら教室に入ってくる生徒もいました。私は授業して帰るだけで、何のかかわりもできませんでした。何もできない辛さを感じ、11月頃になると、高校の授業に行く前に胃が痛むようになりました。病院に行くと「ストレスやろ」と言われました。そのとき、不登校生の辛さを、自分の感じた辛さに重ねて考えるようになりました。

## 地域との連携

校長として赴任した小学校では、地域の方が協力的で大変助けられました。学校通信を地域全体に配りたくて、自治会長にお願いに行きましたが、断られました。でもPTAの方に協力していただいて実現させることができました。通信を配るときに自治会長さんと小学校をこんなふうにしたいなどの話がありました。夜に懇談会をして学校の現状を話し、地域の方から本音の話をいろいろ聞かせてもらうこともありました。“オラの学校”をつくりたかったのです。学校の先生は何年かて別の学校に異動していきますが、地域の方は変わりません。“地域の人々の学校・幼稚園・保育園”であってほしかったのです。そういうつながりをつくりたいと思って小学校の校長を務めました。

## おわりに

大学生も一人ひとり、思いをいっぱいもっています。自由記述で作文を書いてもらうと、大学生自身の虐待の事実が出てくる場合があります。小学校や中学校は担任のかかわりによって虐待の事実がつかみやすいのですが、大学ではなかなかつかむことができません。何かあると休むことがあります。ある学生については、家に行って本人や親とゆっくり話すこともありました。

「保育園を見に行こう」と学生を連れて園の行事を見に行っています。学生が少しでもやりやすいようにと思ってサポートしています。レポートの提出率が悪ければ、何度も学生を呼んで話をし、つながりをつくっています。

地域連携のなかで、地域の人にとって“オラの学校”“オ



ラの幼稚園”“オラの保育園”という意識が高まれば、いろんなことが解決できると考えています。また、学生には保育について「虐待の未然防止を常に考えてほしい」と言っています。日々子どもたちを見て、今日ちょっと様子が違うなと思ったら、とにかくかかわっていきましょう。子どもだけでなく、保護者にもかかわっていきましょう。保護者はみなさんの声を待っていると思います。誰にも相談できず、悩んで虐待をしてしまうこともあります。先生方からひと声かけてもらえることで、ほっとする保護者がいます。

## ト田先生のまとめ

魚森先生は「ほっておけないから今、家庭訪問に行く」という姿勢でした。働き方改革は大切ですが、今の私たちがこだわってやっていくことと働き方改革をどう同居させていくか。人権保育を継承していくうえでも考えていかなければなりません。こうすればいいという答えがあるわけではありません。目の前の子ども・保護者とどう関係をつくっていくか、地道にできることをやっていくしかないのではないのでしょうか。



### 参加者のみなさんの「次への一歩」

職員間でもっと話をする。それがよりよい保育につながる

差別につながることは身のまわりにいっぱい。だからできることからやる！！

家庭での子どもや保護者の背景、奥の奥まで考えられるように

もっともっと保護者といろんな話をしよう。しんどさに寄りそいたい

地域のつながりを密にできるように！

背景を知る一つとして、家庭訪問を担任と一緒に続ける

## 参加者アンケートより

- 今日の研修で、やっぱり「ほっとかへん」ということがキーワードだと思いました。どこまで踏み込むのか。踏み込んでいいのか、難しいところはあるけれど、やれることを少しずつやるしかないと思いました。
- 現場で子どもたちとかかわってこられた実際の話だったので、それを自分の立場に置き換えたなら何ができるだろうと考える機会になりました。グループワークでは、同じ立場の先生と話ができて、明日からまたがんばろうと思えました。

